

令和3年度第1回富山県私立学校審議会議事録

- | | | | | | |
|---|----------------|------------------------------|-------|------|------|
| 1 | 日 時 | 令和3年7月9日(金) 10時00分から10時58分まで | | | |
| 2 | 場 所 | 富山県民会館 702号室 | | | |
| 3 | 定 数 | 12名 | | | |
| 4 | 出席委員の
数及び氏名 | 12名 | | | |
| | | 井上春枝 | 上田雅裕 | 河合敦夫 | 喜田裕子 |
| | | 久郷慎治 | 黒崎紫抄代 | 須田英克 | 里見治美 |
| | | 坪池 宏 | 中田正幸 | 野口教子 | 前川俊朗 |
| 5 | 欠席者 | 無 | | | |
| 6 | 傍聴人数 | 無 | | | |

7 諮問事項

- (1) 私立高等学校等の収容定員に係る学則の変更の認可について
- (2) 学校法人富山育英学園大泉幼稚園廃止に係る認可について

8 報告事項

- (1) 全国私立学校審議会連合会令和3年度理事会(書面審査)について
- (2) 全国私立学校審議会連合会中部支部協議会協議題について

9 議事の経過及び結果

- (1) 開会にあたり、事務局から富山県私立学校審議会規程第7条における委員総数12名全員の出席により定足数に達しており、会議が有効に成立したことが報告された。
- (2) 岡本経営管理部長より挨拶があった。
- (3) 富山県私立学校審議会規程第9条の規定により中田正幸会長が議長となった。その後、今回の諮問事項が富山県私立学校審議会規程第12条第1号及び第2号に該当しないことから審議会の公開を提案し、委員全員異議なく了承した。
- (4) 議事録署名人の選出について、議長の指名により、須田英克委員、野口教子委員が選出された。
- (5) 私立高等学校等の収容定員に係る学則の変更の認可について、資料1、2より事務局から説明があり、次のとおり質疑応答と意見があった。その後、当該議事について利害関係を有する黒崎委員、須田委員、野口委員を除いた委員全員が異議なく認可を適当とする旨で答申することが承認された。

(前川委員)

片山学園について、募集定員で第1学年は110名だが、資料によると、中学3年生が、現在98名である。来年度、110名に対して12名不足するわけだが、収容定員に対して不足する部分を募集することになり、それが募集定員になるという形で考えてよいか。在籍数が各年度バラバラなので、毎年その不足分を募集されるのかということによいか。

(事務局)

学校からは募集定員という形で申請するため、収容定員に達する人数を募集すると聞いている。

(須田委員)

今回の収容定員に係る学則変更について、私立中学高等学校協会から少し話をさせていただく。今ほど説明にあった、令和4年度の私立高校の収容定員については、説明のあった通りである。その枠組みは、公私立連絡会議における合意比率である22.4%程度という内容から、2,000人が、令和4年度の募集定員ということになる。

それぞれの学校が、それぞれの学校のスタンス、学校経営等を見定め、募集定員を決めている。例えば不二越工業高等学校では昨年度対比で、募集定員は5名ほど増加しているが、学校全体的の収容定員は、10名減少している。

私立全体としては、富山第一高等学校を除く9校で減少したことで、3年度の収容定員が6,235名であったのに対して、4年度の収容定員は、6,110名と125名の減少となっている。

今ほどの質問に関連して、質問したい。学則の新旧対照表にある、学則の明記について、片山学園、富山第一高等学校を除く他の8校においては、それぞれの年度の募集定員と収容定員を明記している。

片山学園の学則は他と異なった表記になっており、この辺りは施行規則では収容定員を求めていることになっていることから毎年度の募集定員ではなく収容定員という形をとっていると思うが、この表記については、事務局としてどのように考えるのか。

(事務局)

学則においては、基本的には収容定員を定めていくものという前提がある。

この私学審議会において、審議する内容としては、収容定員が各学校に見合っているものかどうかその適否を判断いただいている。学校ごとの学則では確かに「収容定員」、あるいは「入学定員」という書き方が主流であるが、学年ごとの募集定員を収容定員として表記することについては事務局として、特に問題があるとは考えていない。

(須田委員)

学則では、各年度の入学定員は明記しなくてもよいということによいか。

(事務局)

収容定員の適否の判断においては、必ず毎年度のものを書かなければならないということはない。

(中田会長)

他に何か質問等はあるか。

ないようであれば、私立高等学校等の収容定員に係る学則の変更認可について、認可を適当と認める旨、答申してよろしいか。

(委員全員 (利害関係者除く))

異議なし。

(6) 大泉幼稚園の廃止認可について、資料3により事務局から説明があり、次のとおり意見があった。

(上田委員)

私立幼稚園はもともと3歳児からの入園としてきた。2歳児特区があったことから2歳児から入園している園も一部あるが、やはり少子化の影響で核家族化が進み、3歳児まで家庭で子育てをする家庭が大変減ってきている。よって、3歳で園児募集をしてもなかなか園児がいないというのが、富山県の幼稚園の状況になりつつある。

一方の保育園は、もともと0歳児から入っている。保育園も昔は3歳から入園する園児がたくさんいたが、どんどん核家族化して2歳児から入るようになり、1歳でも入るようになり、今では育児休業明けで入るという現状に変わってきている。このことから、保育園ではどんどん下の方の園児が増えてきているため、保育園の園児数はあまり減っていない。

ところが、幼稚園は3歳からということで、その時点で募集しても園児はいない。このことから、幼稚園は公立も含め、園児の減少が極端となっている。その中で今、新しい子ども子育て制度が立ち上がり、認定こども園に移行した私立幼稚園は多数あるが、移行のためには高いハードルがあり、その一つの例が給食室を作らなければいけないという点である。

耐震化の問題も含めて、早い判断で対応した園は何とか生き残っているが、少しその対応が遅れてしまうと、もはや園児がいないという状況に陥っている。休園した園はほかにもある。

また、先ほどの職員の大量退職の理由かどうかは不明だが、保育園が0歳児も1歳児も預かるようになってきていることから、職員がこれまで以上に必要になってきている。0歳児の場合6人に一人の職員が必要であり、保育園にどんどん職員が取られる形になり、幼稚園の職員不足が著しくなっている。

正直、園児数の減少といった苦しい経営の中で、高い給料も出せない。そして職員がどんどん減っている中で、経営する側として私立幼稚園は大変に苦しんでいる。

(中田会長)

今の話をお聞きすると廃止もやむを得ないという状況かと思われる。

他に何か質問等はあるか。ないようであれば、大泉幼稚園の廃止認可について認可を適当と認める旨答申してよろしいか。

(委員全員)

異議なし。

- (7) 全国私立学校審議会連合会令和3年度理事会(書面審査)について、資料4により事務局から説明があった。
- (8) 令和3年度の全国私学審議会連合会の中部支部協議会協議題について事務局より報告があった。
- (9) この他、各委員それぞれの立場からの現状を踏まえ、全体を通しての意見交換がなされた。
- (10) 事務局より、今回の審議会の案件がすべて終了した旨を伝え、審議会を終了した。

令和3年7月9日